AMCoR
Asahikawa Medical College Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

旭川医科大学研究フォーラム (2001) 2巻1号:90-91.

学会の動向:第4回日本健康福祉政策学会学術大会を終えて

廣岡憲造

アの問題」、「医療情報と医療政策」と主に８つに分ける発表であった。これは４つの分科会で、２日間にわたって発表され、それぞれ討議された。

本大会は年次大会であったので、評議委員会、理事会、それに総会も開かれた。その他懇親会も開かれ、旭川医科大学の久保学長が挨拶をされ、そして牧野副学長が乾杯の音頭をとられ、なごやかなうちに終えた。本大会は11月という季節で、雪などの心配があったが、幸い天候に恵まれ、無事に終了することができた。

大会は上述の準備委員会の先生方、そして実行委員の先生方、ならびに第一内科の教官と一般教育の教官と事務官の並々ならぬ働きによって無事開催することができた。ここに感謝の意を表したい。いま生命倫理はいろいろな分野で問題になり、一般の人々にも関心を呼んでいる問題である。総じてこの学際的な学会が北国で開かれたことは意義深いことだった。今後ますます生命倫理が問題になり、それにつれ、この学際的学会もますます重要となろう。

学界の動向

第４回日本健康福祉政策学会学術大会を終えて

広　岡　憲　造*

平成12年９月23日～24日、北海道らしい高い秋晴れの中、第４回日本健康福祉政策学会学術大会が旭川市民文化会館において開催されました。旭川医大公衆衛生学講座が全国学会を主催するのは初めてのことでしたが、学内をはじめ道内、道外の保健行政に携わる多くの方々のご助力を得て、成功裡に終了しました。全国からの会員37名、一般参加者118名の計155名の方々に参加していただきました。本学会と第４回大会の様子を簡単に紹介します。

日本健康福祉政策学会は1997年６月29日に設立されました。これまでの学会がともすれば専門家中心であったのに対し、本学会は地域住民も含めた様々な領域の人たちが気軽に参加する事によって、現場で真に必要とされている健康福祉政策を実現させるために設立されました。

日本における公衆衛生活動の主要なテーマは、伝染病、栄養障害等の疾病対策から生活習慣病を中心とする慢性疾患対策、さらには発症予防をめざすヘルスプロモーションへと変化してきました。それに伴い、病原体対策では有用であった医師や保健婦などの専門家主導による体制では十分対応することができなくなってきました。これからは、地域住民が主体的に参加し、専門家はそれをサポートする体制づくりが必要となります。しかし、これまでの医学関連学会では、これらのニーズに十分に応えることができないことが明らかになってきました。これが「政策科学」「地方主権」「市民参加」のキーワードを掲げ、日本健康福祉政策学会を設立した理由です。

このような設立趣旨を受けて、各地に地方会が設立されました。たとえば島根では、住民、福祉、行政、医療専門家に加え、マスコミ、福祉医療関連企業、情報産業関連企業、弁護士など、実に多彩な会員が参加して地方会が発足しています。北海道では北海道保健計画研究会が立ち上がっていますが、残念ながら住民の参加はまだ実現していません。

本学会は「地方主権」を実現する目的もあって、隔年で学術大会を地方において開催しています。これまで東京都、松本市、東京都中野区の順で開催しました。そして今回の第４回大会を旭川市で開催する運びとなりました。以下に、第４回大会の内容を紹介します。

第１日目午前の部では北海学園大学法学部の森　啓先生に特別講演をお願いしました。

演題名は「健康の町づくり：成熟社会の公共課題－

＊旭川医科大学　公衆衛生学講座

政策形成の戦略・行政の役割」で、政策の理論と変遷、今後の展望についてお話しされました。２時間にわたり、今後の町づくりにおける行政・住民・さらにはNPOの役割について斬新な提案をされ、その中で行政の積極的な政策情報の公開と、市民による共有が必要であると強調されました。講演後に行われた討論で森先生は、行政と市民が共働するには、その前提として市民が無関心であってはならず、市民の価値観を創造するのも行政の役割であると主張されました。行政との関わりに消極的な市民もいる中で共働を模索している行政サイドの人々にとり、この主張は大きなインパクトを持ったようです。演壇と会場が一体となった熱心な討論により、特別講演は予定時間を15分もオーバーして終了しました。

昼休みを挟み、午後の部では大会長講演とシンポジウム（本学会では「ワークショップ」と呼んでいる）が行われました。大会長講演では旭川医大公衆衛生学講座の羽田　明により、「住民ニーズに応じた健康教育のための遺伝子解析」と題して、生活習慣病に対する遺伝子解析によるアプローチと、個々人の体質に合わせたより有効な予防法に対する展望が報告されました。

シンポジウム「地方の時代と健康文化都市づくり」では、島根医科大学の塩飽邦憲先生と旭川市保健所の後藤良一先生がコーディネーターとなり、４人の発言者によって報告が行われました。これら４人は、それぞれ農村、地方都市、中核市、大都市と、人口規模により選ばれました。このシンポジウムは、住民参画による健康文化都市づくりを実現するため、本学会設立当初より一貫して行われてきたものです。前回までの大会で話し合われた成果を踏まえ、今回は健康文化都市づくりの地域別特徴と、行政スタッフと住民の関係性、都市づくりの評価法について討議しました。各地域で抱える問題と目標の多様性から討議は最終的な結論にはいたりませんでしたが、この成果は次回のシンポジウムに引き継がれていく予定です。

シンポジウム終了後は旭川地ビール館に会場を移し、懇親会をおこないました。もっと討議をしたいという要望が強かったためか、予想を超える参加者が集まり、大会事務局としては嬉しいながら会場予約の関係からヒヤリとさせられる場面もありました。

第２日目の午前中はポスターセッションをおこないました。ポスターセッションには全国から21演題が集まり、このような小さな規模の大会としては十分な演題数であったように思います。今回は各演題３分間の口演時間を用意し、２グループの口演を同時に進めるという形式でおこないました。

午後からは本学会の地方会である北海道保健計画研究会による司会進行で学習会がおこなわれました。学習会では渡島保健所主任技師の木津明彦先生が「公衆衛生従事者のための学習理論入門」について講演しました。専門的なテーマである学習理論について、禁煙教育を事例に解説していただきました。以上で第４回学術大会の全日程が終了しました。

本学会は生誕間もない若い学会であるため、大会の運営に関しても従来にない新たな試みをおこないました。ポスターセッションでは演題を２グループに分け、座長の進行にしたがい短い口演をおこないました。演者との距離が近いので、聴衆も積極的に議論に参加できたのではないかと思います。また、会費について、会員外の参加者は安い参加料で気軽に参加できるようにしました。住民との共働が本学会の目標ですから、このような工夫は、是非、次期大会にも引き継いでいただけたらと考えています。

旭川のような地方都市では、保健行政の第１線で働く方々や、ましてや地域住民は、なかなか全国規模の学会に参加する機会には恵まれません。そのような状況で、今回の学術大会は地域から大きな反響をいただき、旭川市における学術大会の開催を歓迎する意見が、多数、寄せられました。このような声に、旭川医大は今後、どのように応えて行くべきか、それを考えさせられる大会でした。

なお、今大会には北海道と旭川市、そして若手保健所医師により構成される北海道保健所21世紀の会からご後援をいただきました。ここに改めて御礼申し上げます。